

# 西側はムスリムという怪物を作っている：ムスリム・テロ の責任者は誰か？

【訳者注】透徹した眼をもつヴルチェックの 3 つ目の論文紹介。パリの風刺雑誌社襲撃の背後にある、西側とイスラム世界の関係の長・短期的な歴史が与えられていて、この事件を近視眼的に見るべきでないことがわかる。とりわけ、中東を中心とする紛争の、入り組んだ勢力関係の説明は貴重と思われる。ISIS がアメリカの敵なのか味方なのか、何が何だかわからないと言う人が多いと思うが、この論文の説明は簡潔かつ明快で合点がいくだろう。

By Andre Vltchek

January 10, 2015 (Information Clearing House)

百年前には、2 人のムスリムがカフェや公共の乗り物に入って自爆し、数十人を殺すというようなことは考えられなかつただろう。あるいはパリの風刺雑誌のスタッフを虐殺することも。そうしたことは全くなされなかつた。

エドワード・サイードの回顧録を読んだり、東エルサレムの老人方に話しかけてみれば、パレスチナ社会の大部分は、完全に世俗的で穏健だったことが明らかになる。彼らは宗教的教義より、生活、文化、そしてファッションにさえ関心があった。

シリア、イラク、イラン、エジプト、インドネシアを含む、多くの他のムスリム社会についても同じことが言えるだろう。古い写真を見るとそれがわかってくる。古い映像を繰り返し注意深く研究することが大切なのはそのためである。

イスラム教は宗教というだけではない。それは巨大な文化、地上で最大の文化の一つであり、それは最高の科学や建築の業績のいくつかによって、また医学分野の無数の発見によって人類に恩恵を与えた。ムスリムたちは驚嘆すべき詩を書き、美しい音楽を作った。しかしとりわけ彼らは、世界で最も古い社会的施設のいくつかを発達させ、そこには巨大な公の病院や、モロッコのフェズのアルカラウィン大学のような、最初の大学も含まれる。

「社会的」という概念は、多くのムスリムの政治家にとって自然なものであり、西洋が、左

翼の政府を転覆させたり、ロンドンやワシントンやパリのファシスト同盟者を王位につかせたりして、野蛮な干渉をしなければ、イラン、エジプト、インドネシアを含むほとんどすべてのムスリム国家は、今頃は、非常に穏健な、ほとんどは非宗教的な指導者たちのグループの下で、社会主義国になっていた可能性が高い。

\*\*\*

過去においては、無数のムスリム指導者が、世界の西洋支配に対して立ち上がり、インドネシア大統領アーマット・スカルノのような大きな人物は、共産党やそのイデオロギーに近かった。スカルノは地球規模の反帝国主義運動、「非同盟」運動を始めさせた。これは 1955 年、インドネシアのバンドン会議で明文化された。

それは、おおむねファシストの支配者や植民地主義者に親近感をもち、王や、大商人や、ビッグビジネスの寡頭政治家をもつ、保守的な、エリート志向のキリスト教とは、著しい対照をなすものだった。

「帝国」にとっては、進歩的でマルキスト的なムスリムの指導者がいて人気があり、中東や資源の豊富なインドネシアを支配しているということは、絶対に許せないことだった。もし彼らが、その天然資源を使って彼らの人民の生活を向上させるとしたら、「帝国」やその企業に何が残るだろうか？ それは何が何でもやめさせなければならない。イスラムは分割し、過激派や反共グループや、人民の福祉などどうでもいいような者たちを侵入させなければならない。

\*\*\*

今日のイスラムの、ほとんどすべての過激な運動は、世界中どこでも、ワッハーブ (Wahhabi, Wahhabism) という超保守的で反動的なイスラムの一派に結びついていて、彼らが、サウディアラビア、カタールといった、湾岸のしたたかな西側同盟国の政治的生命をコントロールしている。

アブドラ・モハマド・シンディ博士を引用すると――

歴史的記録から非常に明らかなことは、もしイギリスの助けがなければ、ワッハービズムもサウディ議会も今日存在していなかったということだ。ワッハービズムとは、イギリスが生命を吹き込んだ。イスラムの根本主義的運動である。サウディ議회를擁護することを通じて、アメリカもまた、2001 年 9 月 11 日のテロリスト攻撃にもかかわらず、

直接的・間接的にワッハービズムを支援している。ワッハービズムは、暴力的、右翼的、超保守的、硬直し、過激で、反動的、女性差別的、不寛容で…

西側は 1980 年代、ワッハーブ派に完全な援助を与えた。彼らは雇用され、ソ連がアフガニスタンに引き込まれ、1979 年から 1989 年まで続いた苦い戦争に引き込まれた後は、財政援助と武器を与えられた。この戦争の結果として、ソ連は、経済的にも心理的にも疲弊して崩壊した。

ムジャハディーンは、ソ連邦諸国のみならず、カブールの左傾した政府と戦っていたが、西側とその同盟国によって鼓舞され、財政的に支援された。彼らはムスリム世界のあらゆる隅々からやってきて、共産主義無宗教者たちと“聖戦”を戦った。

米国務省アーカイブによれば――

いわゆるアフガン・アラブの浮動層で、無神論共産主義者に聖戦を仕掛けたいと思っていた外国人戦士たちがいて、その中で目立っていたのが、オサマ・ビン・ラディンという若いサウディだった。彼の率いるアラブ集団が最終的にアルカーイダへと発展した。

アルカーイダとは、西側によって創られ、いろんなムスリム国家へと潜入させられた、ムスリム急進派集団の一つだが、より最近になって、ISIS（または ISIL と呼ばれる）もそこに含まれる。ISIS は、シリア/トルコ、およびシリア/ヨルダン国境の“避難民キャンプ”で生まれた過激派軍団で、それは NATO と西側によって、バシヤール・アル・アサドのシリア（世俗的）政府と戦うべく財政援助された。

この潜入させられた過激派はいくつかの役目を果たしている。西側は、自分の敵との戦争、すなわち「帝国」の完全な世界制覇に執拗に邪魔をする国家との戦争において、彼らを代理戦士として使う。ところがそのうちに、これら過激軍団が“完全にコントロールできなくなる”と（必ずそうなるのだが）、その後は、案山子として、“テロへの戦い”を正当化する標的として役立つことになる。あるいは ISIS がモスルを占領した後のように、イラクにおける西側軍隊を、再び活動させる口実として用いられる。

過激ムスリム集団についての物語が、新聞や雑誌のフロントページで絶えず展開され、あるいはテレビで放映されて、読者や視聴者は、「なんとこの世界は危険なのだろう」「西側がそこに関わることのなんと重要なことか」などと、思い込まれることになり、その結果として、監視の重要性、安全保障対策のみならず、膨大な“防衛”予算と、無数のならず者国家への戦争が、いかに不可欠であるかを知らされるのである。

\*\*\*

穏健社会主義に傾いていた平和で創造的な文明から、ムスリム国家とイスラム教そのものが、突然、脱線させられ、畏にかけられ、出し抜かれ、外国の宗教的・イデオロギー的な移植物に侵入され、西側のイデオログやプロパガンディストによって、“恐るべき脅威”、テロリズムと非寛容のこの上ない象徴へと変形された。

この状況は徹底してグロテスクというべきものだったが、誰も本当に笑う者はいない。あまりにも多くの人々が結果として死に、あまりにも多くが破壊された！

インドネシアは、進歩的なムスリムの価値をこのような破壊するメカニズムが、現実はどう働くかの、最も顕著な歴史的例証の一つである――

1950年代から1960年代初めにかけて、アメリカ、オーストラリアと西側一般は、スカールノ大統領の、進歩的な反帝国主義的・国際主義的なスタンスと、ますます民衆に人気を博したインドネシア共産党に、ますます“懸念を示す”ようになった。しかし彼らがそれ以上に心配したのは、知的に進んだ、社会主義的で穏健な、イスラム教のインドネシア・ブランドであり、これは明らかに共産主義的理想と結びつくものだった。

悪名高いイエズス会士 **Joop Beek** をはじめとする、キリスト教の反共イデオログと“プランナー”が、インドネシアに侵入してきた。彼らは、イデオロギー的なものから民兵的なものに至る秘密組織を作り、西側を助けてクーデタを計画し、1965年とその後に、100万から300万の人命を失わせた。

西洋で形成され、**Joop Beek** と彼の一派によって広まった、きわめて効果的な反共・反知性的プロパガンダは、大きなムスリム組織の多くのメンバーを洗脳することにも貢献し、クーデタの直後には、人々を扇動して左翼殺しにも参加させた。共産主義だけでなく、イスラム教が、インドネシア内部の、西側寄りのキリスト教“第五列”の、主たる標的として選ばれていたとは、彼らは全く知るよしもなかった。あるいはもっと正確に言えば、標的は、左傾したリベラル・イスラム教だった。（注：「第五列」**fifth column** とは、味方の中であって敵方の利益のために働くスパイ・グループのこと）

1965年のクーデタのあと、西側スポンサー付のファシスト独裁者スハルトは、**Joop Beek** を主たるアドバイザーとして用いた。彼はまた、ビークの“弟子たち”にイデオロギー的に依存した。経済的には、この体制は **Liem Bian Kie** をはじめとする、主としてキリスト教

徒のビジネスの大物と関係を結んだ。

地上で最もムスリムの多い国であるインドネシアで、ムスリムたちが出場停止となった。彼らの“頼りにならない”政治政党は、独裁期間中、禁止され、政治も（隠れて）経済も（公然と）、キリスト教的、西側支持の少数者の厳しい支配下に落ちた。今日に至るまで、この少数者は、反共の戦士や、固く結ばれた事業カルテルやマフィア、メディア、“教育機関”などの、複雑で毒のあるネットワークをもっており、そこには私立の宗教学校があり、腐敗した説教師（その多くは 1965 年の虐殺に加わった）、その他、その地方的・地球的体制への協力者がいる。

インドネシアのイスラム教は、たいていは貧しく、重要な影響力をもたない、沈黙した多数者の立場に落とされた。それが国際的な新聞見出しに出るのは、ただ、欲求不満の白衣の兵士たちがバーを荒らしたり、その過激分子（多くはムジャヒディンや、ソビエト - アフガン戦争に関係をもつ）が、バリやジャカルタの、ナイトクラブや、ホテルや、レストランを襲うような時だけである。

それとも彼らは、そんなことさえ、本当にやっているのだろうか？

前インドネシア大統領で、進歩的なムスリム聖職者アブダラマン・ワヒド（エリートたちによって役職から締め出された）は、かつて私にこう話した——「私は誰が、ジャカルタのマリオット・ホテルを爆破したのか知っている。それはイスラム教徒による攻撃ではなかった。それはインドネシア秘密警察によるもので、彼らの存在と予算を正当化し、西側の機嫌を取るためだった。」

\*\*\*

「私はあえて言うが、西側の帝国主義が、急進的党派とよしみを通じたというよりは、むしろ彼らを創ったのだよ」と、私の友人で、主導的な進歩的ムスリム知識人 **Ziauddin Sardar** が、ロンドンで私に話したことがある。

サルダル氏は続けてこう言った——

我々は、植民地主義は、単にムスリムの国家や文化を破壊しただけではないと理解する必要がある。それはムスリム文化を抑圧し、そこから知識、学問、思想、創造性を究極的に消し去った。植民地運動は、まずイスラムの知識と学問を横取りすることから始まり、それが“ヨーロッパ・ルネッサンス”と“啓蒙運動”の基礎となり、最後にはこの

知識と学問を、ムスリム社会からも歴史そのものからも、消し去ることになったのだ。それはまず物理的にそれを根絶した——学問の施設を破壊し、閉鎖し、ある種の土着の知識を禁圧し、地方の思想家や学者を殺しつくすことによって。それから「歴史」を、西洋文明の歴史として書き換え、すべての他の少数文明の歴史を、その下に従属させることによって。

第二次大戦後に積み重ねた年月の希望から、現在の完全な暗闇に至るまで——何とそれは長く恐ろしい旅であったことか！

ムスリム世界はいま傷つき、屈辱を受け混乱していて、ほとんど常に防御姿勢をとっている。

それはアウトサイダーによって誤解され、しばしば西洋とキリスト教の世界観に頼らざるを得ない当事者によってさえ頻繁に誤解される。

イスラムの文化をきわめて魅力あるものにしてきた、寛容、学問、人々の福祉への関心といったものが、外国から破壊されて、ムスリムの領域から切り落とされた。残されたのは宗教だけだった。現在、ムスリム国家のほとんどは、独裁者によって、軍の、あるいは腐敗した一味によって支配されている。彼らのすべてが、西側とその地球的な体制や利益に、しっかりと繋がっている。

いくつかの大きな国家、また南・中央アメリカ、さらにアフリカの「帝国」でそうだったように、西洋の侵略者たちと植民地主義者たちは、偉大なムスリム文化を全面的に無化することに成功した。

力によって置き換えられたものは、貪欲、腐敗、そして残忍さだった。

西洋と異なった、非キリスト教的な土台に基づいているすべては、「帝国」によって灰燼に帰せられたように見える。ただ最大の、最も逞しい文化だけはまだ生き残っている。

あるムスリム国家がその本質へ戻ろうとし、それ自体の社会主義的あるいは社会的な方向へ踏み出そうとするときは、いつでも——それがイランであれ、エジプト、インドネシア、また最近では、イラク、リビア、シリアであれ——それは野蛮な拷問を受けぶち壊される。

人民の意志は、礼儀の一片もなく退けられ、民主的に表現された選択はくつがえされる。

何十年にもわたってパレスチナは、自由とその基本的な人権を否定されてきた。イスラエル

も「帝国」と共に、彼らの自己決定の権利に唾を吐きかけている。パレスチナの人民はゲットーに閉じ込められ、辱められ、殺されている。宗教だけが彼らの一部に残されたすべてだ。

“アラブの春”は脱線させられ、エジプトからバーレーンに至る、ほとんどすべての場所で、停車してしまった。そして古い体制と軍部が権力の座に戻った。

アフリカの人々のように、ムスリムたちは、天然資源の豊かな国に生まれたことに対する、恐ろしい代価を払っている。彼らはまた、中国のように、歴史上最大の文化、すべての西洋文化を凌ぐ文化を持ったために残忍な扱いを受けている。

\*\*\*

キリスト教は世界を略奪し残忍な扱いをした。イスラムは、サラディンのような偉大なスルタンを持ち、侵略者に向かって立ち上がり、アレppoやダマスカス、カイロやエルサレムなど、偉大な都市を防衛した。しかしそれは特に、略奪や戦争よりも、偉大な文明を建設することにより興味をもった。

現在、西側のほとんど誰も、サラディンのことや、ムスリム世界の偉大な科学的、芸術的、あるいは社会的業績のことを知らない。しかし誰もが ISIS のことはよく知っている。もちろん彼らは ISIS のことを、“イスラムの過激集団”として知っているだけで、中東を不安定化させるのに用いられる西側の主たる道具の一つ、として知っているのではない。

風刺雑誌「シャルリ・エブド」のジャーナリストたちの死（否定すべくもなく恐るべき犯罪！）に対し、“フランスが喪に服している”とき、再びヨーロッパ中で、残忍で好戦的な輩として描かれるのはイスラムであって、キリスト教根本主義に立つ十字軍以来の西側ではない。西側こそ、イスラム世界のすべての、穏健で、非宗教的・進歩的な政府とシステムを転覆し、殺戮し続け、ムスリムの人々を狂気と錯乱に追いやっている張本人である。

\*\*\*

過去 50 年間に、およそ 1 千万人のムスリムたちが殺されたが、その理由は、彼らの国家が「帝国」に従わなかったため、あるいは十分に心から従わなかった、または単に邪魔になったからである。犠牲者は、インドネシア人、イラク人、アルジェリア人、アフガン人、パキスタン人、イラン人、イエメン人、シリア人、レバノン人、エジプト人、そしてマリ、ソマリア、バーレーン、その他多くの国の人々である。

西側は、最も恐ろしい怪物たち（サイコパス）を見つけ、彼らに何十億ドルを投げ与え、彼らを武装し、高度な軍事訓練を施し、その上で彼らを解き放ったのである。

テロリズムを養っている国々、サウディアラビアやカタールは、西側の最も親密な同盟国であり、ムスリム世界全域へ恐怖を輸出するが、それによって罰せられたことはない。

ヒズボラのような、偉大な社会的ムスリム運動は、現在、ISIS に対して命をかけた戦闘を行っているが、それはまた、イスラエルの侵略に対する戦いの時に、レバノンに電撃的に目覚めさせた。その偉大な運動が、西側によって編纂された“テロリスト一覧表”に載っている。これは多くのことを説明する——誰でも注意を払う気になれば。

中東から見れば、西側は、ちょうど十字軍遠征の時のように、ムスリム諸国とムスリム文化の完全な破壊を狙っている。

ムスリム宗教について言えば、「帝国」は、羊人間のような者たちだけは受け入れる。つまり西側の極端な資本主義と、地球支配的な彼らの地位を受け入れる者たちだ。唯一の他の許せるイスラムのタイプは、西側そのものと湾岸の同盟者によって製造された者たち、進歩と社会的正義を敵として戦うように躰けられた者たち——自分自身の人民を食う者たちだ。

（著者紹介は、1/6 掲載「2015 年はファシズムとの戦い——理性あるいは力による人間の防衛」をご覧ください。）